

## 5. 魚田遺跡第7次発掘調査報告

### 1. はじめに

今回の調査は、平成20年度一般府道富野荘八幡線地方道路交付金事業に伴う発掘調査を京都府建設交通部の依頼を受けて実施した。魚田遺跡は、八幡市岩田南辺部と京田辺市の大住北辺部にまたがる弥生時代から中世までの遺物散布地として知られる遺跡である。今回の調査地は、京田辺市大住大峯に位置し、遺跡範囲の北東部分での遺構の確認を目的とした試掘調査である。

現地調査は、平成20年10月6日～11月12日の期間実施した。調査面積は、230㎡である。調査は、調査第2課長補佐兼調査第3係長石井清司ならびに同調査員村田和弘が担当し、現地調査および報告については村田が担当した。附載とした魚田遺跡周辺の地形および破堤堆積物の考察については、増田富士雄(同志社大学理工学部・当調査研究センター理事)・伊藤有加(同志社大学工学研究科)・坂本隆彦(同志社大学聴講生)・佐藤智之(京都大学大学院理学研究科)が執筆した。また、現地調査にあたって

は、京田辺市教育委員会ならびに京都府教育委員会、各関係機関の方々にご指導・ご教示を得た。記して感謝したい。  
(注1)

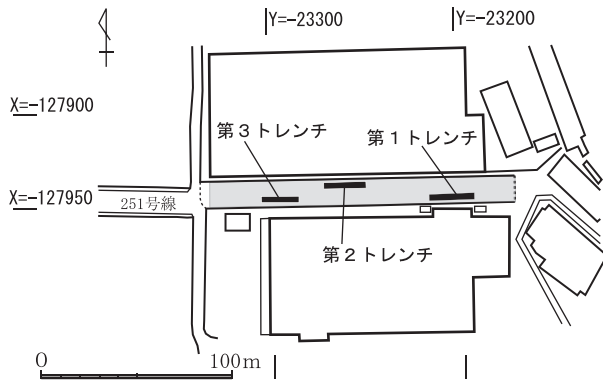
なお、調査に係る経費は、全額、京都府建設交通部が負担した。

### 2. 位置と環境

京田辺市は、京都府南部に広がる南山城平野のほぼ中央に流れる木津川の左岸に位置する。西部は生駒山地に連なる丘陵地帯で、東部は北に流れる木津川



第1図 調査地と周辺の遺跡(国土地理院 1/25,000 淀・宇治)  
1.魚田遺跡(今回の調査地) 2.新田遺跡 3.門田遺跡 4.女谷横穴群  
5.荒坂横穴群 6.松井横穴群 7.相合遺跡 8.西村遺跡 9.向谷遺跡  
10.大住車塚古墳 11.大住南塚古墳 12.口仲谷古墳群



第2図 調査トレンチ配置図

遺跡などが所在する。南西側の丘陵裾部および谷地形には、古墳時代後期に属する女谷・荒坂横穴群や松井横穴群などがあり、さらに南側の谷筋裾部には口仲谷古墳群が所在する(第1図)。八幡市の南東部から京田辺市の北端部の丘陵および平野部は、数多くの遺跡が集中して分布する地域である。

### 3. 調査概要

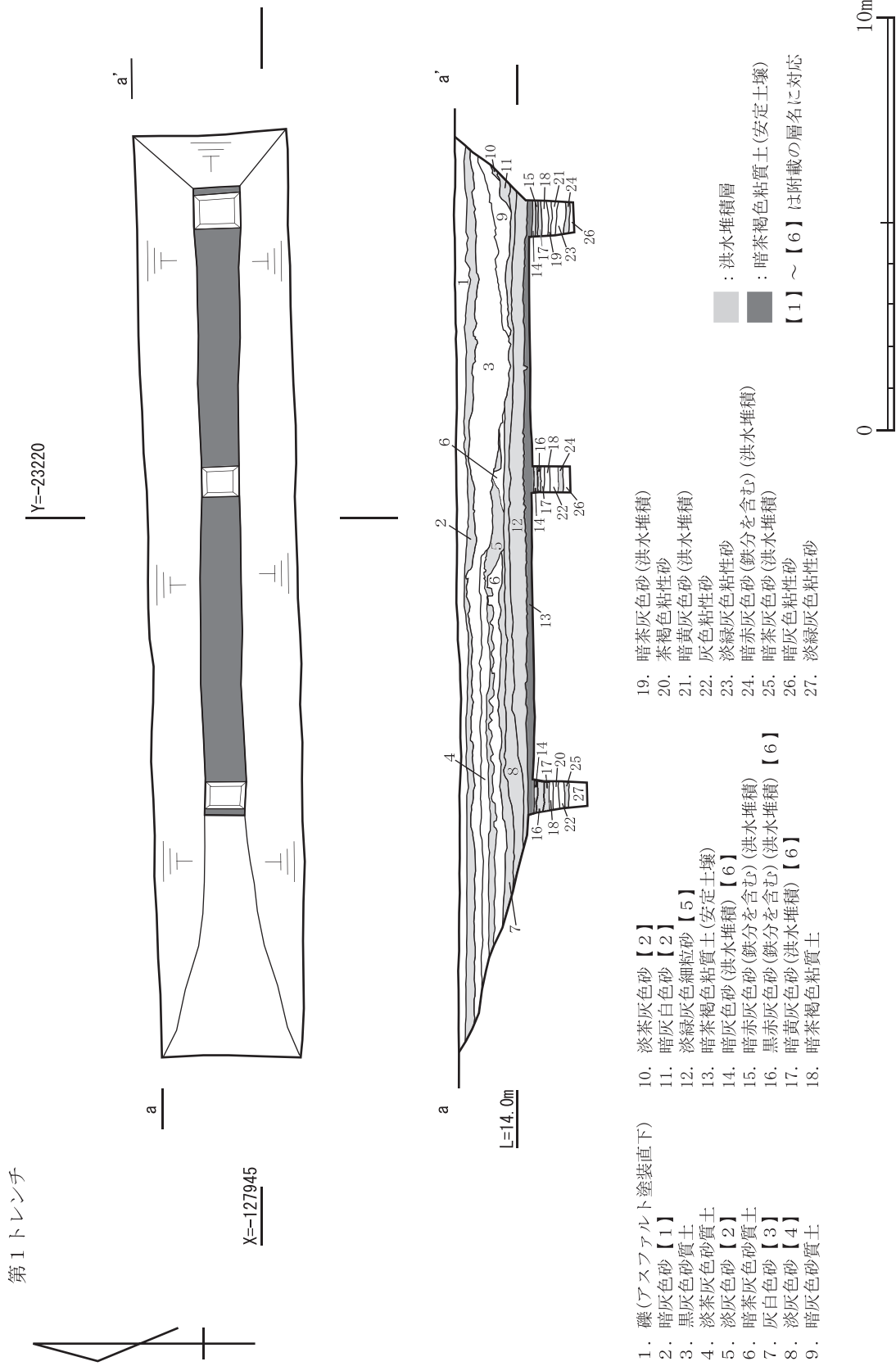
今回の調査地は、魚田遺跡においても北東端部にあたり、京田辺市大住大峯に所在する。調査は、遺構を確認するための試掘調査として、調査範囲内に3か所の試掘トレンチを設定し調査を実施した(第2図)。まず、重機による表土掘削を行い、遺構と思われる溝が確認できた粘土層の安定面まで掘削した。その後、人力による掘削作業を行い遺構の検出作業を進めた。試掘トレンチとして設定した調査地区を東から順に1～3トレンチと呼称し、遺構の確認作業を行った。

(1) 第1トレンチ 調査地内の東端部に設定した調査区である。現地表面から20cm程で現代の耕作面である黒色土の堆積層があり、その直下から約1.6mの深さまでは、数度にわたる木津川の氾濫(洪水破堤)によって堆積した砂の堆積層が続き、約1.9mで粘土質の安定面を確認した(第3図)。遺構の確認作業を行ったが、遺構・遺物は確認できなかった。さらに、下層遺構を確認するために3か所の断ち割り(約1.5m)を行ったが、10cm前後の砂と粘土層の互層が続くのみであった。しかしながら、トレンチ壁面では、木津川の洪水破堤によって形成された地形や洪水砂の堆積状況が良好に残っており、調査地周辺の地形の成因に関して良いデータを得ることができた。

(2) 第2トレンチ 調査地の中央部に設定した調査区である。現地表面から20cm程で現代の耕作面、その直下約1.5mの深さまでは木津川の氾濫(洪水破堤)による数層の砂の堆積層、約1.8mで粘土質の安定面を確認した(第4図)。粘土質の安定面には、人力で掘削された溝状の遺構を確認した。溝は、南北方向に約1mの幅で等間隔に掘り込まれている。溝の底部には、鋤などの耕具使用痕跡が残っていた。また、一部であるが東西方向に区切られたものも確認した。溝の埋土は、洪水による砂で一度に埋まった状況が確認できた。溝状の遺構は、何らかの耕作溝と考えられるが、用途については不明である。この溝の埋土(第4図第6層)からは、土師器皿(第

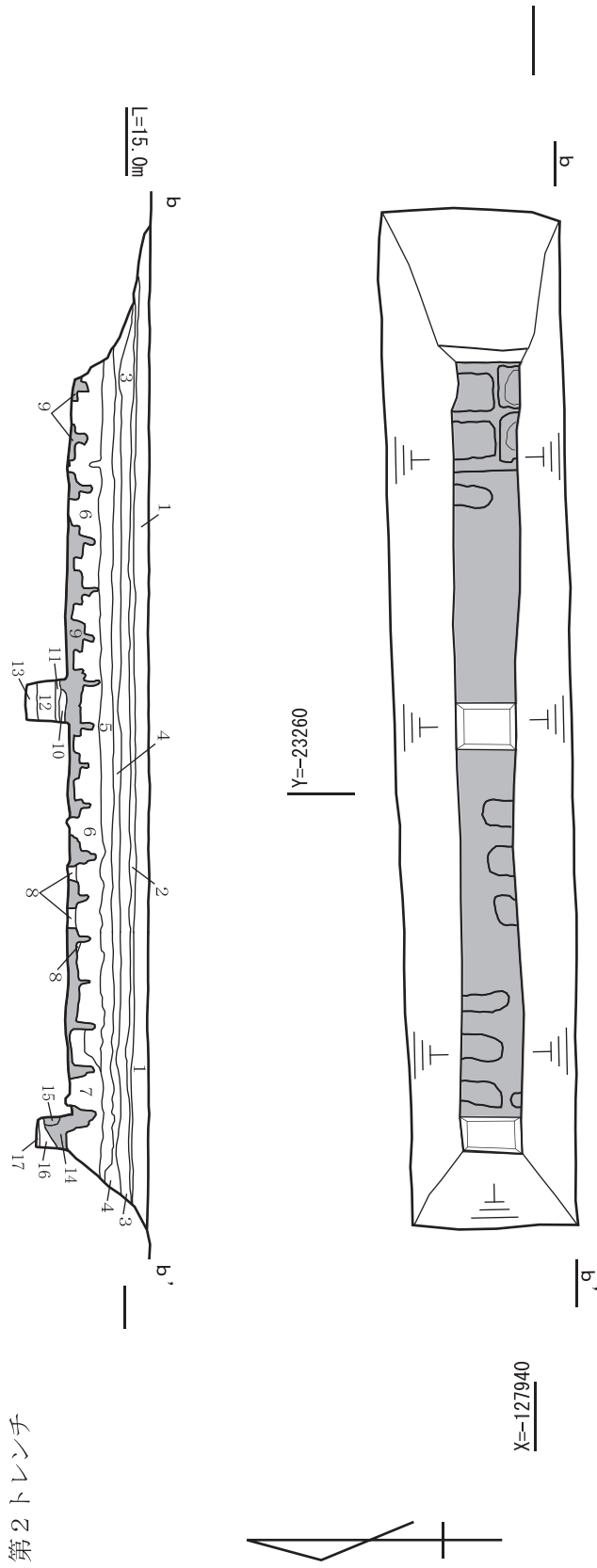
によって形成された沖積地が広がっている。魚田遺跡の調査は、これまで6度の調査が実施されている。<sup>(注2)</sup>

周辺の遺跡として、北西側には弥生時代～古墳時代の集落跡で、<sup>(注3)</sup> 竪穴式住居跡や掘立柱建物跡、溝などの遺構が検出された新田遺跡、東側に飛鳥時代の竪穴式住居跡などが検出された門田遺跡、南側には中世の集落跡である向谷遺跡や西村



- |                  |                           |                        |
|------------------|---------------------------|------------------------|
| 1. 礫(アスファルト塗装直下) | 10. 淡茶灰色砂【2】              | 19. 暗茶灰色砂(洪水堆積)        |
| 2. 暗灰色砂【1】       | 11. 暗灰白色砂【2】              | 20. 茶褐色粘性砂             |
| 3. 黒灰色砂質土        | 12. 淡緑灰色細粒砂【5】            | 21. 暗黄灰色砂(洪水堆積)        |
| 4. 淡茶灰色粘質土       | 13. 暗茶褐色粘質土(安定土壌)         | 22. 灰色粘性砂              |
| 5. 淡灰色砂【2】       | 14. 暗灰色砂(洪水堆積)【6】         | 23. 淡緑灰色粘性砂            |
| 6. 暗茶灰色砂質土       | 15. 暗赤灰色砂(鉄分を含む)(洪水堆積)    | 24. 暗赤灰色砂(鉄分を含む)(洪水堆積) |
| 7. 灰白色砂【3】       | 16. 黒赤灰色砂(鉄分を含む)(洪水堆積)【6】 | 25. 暗茶灰色砂(洪水堆積)        |
| 8. 淡灰色砂【4】       | 17. 暗黄灰色砂(洪水堆積)【6】        | 26. 暗灰色粘性砂             |
| 9. 暗灰色砂質土        | 18. 暗茶褐色粘質土               | 27. 淡緑灰色粘性砂            |
- : 洪水堆積層  
■ : 暗茶褐色粘質土(安定土壌)  
【1】～【6】は附載の層名に対応

第2トレンチ



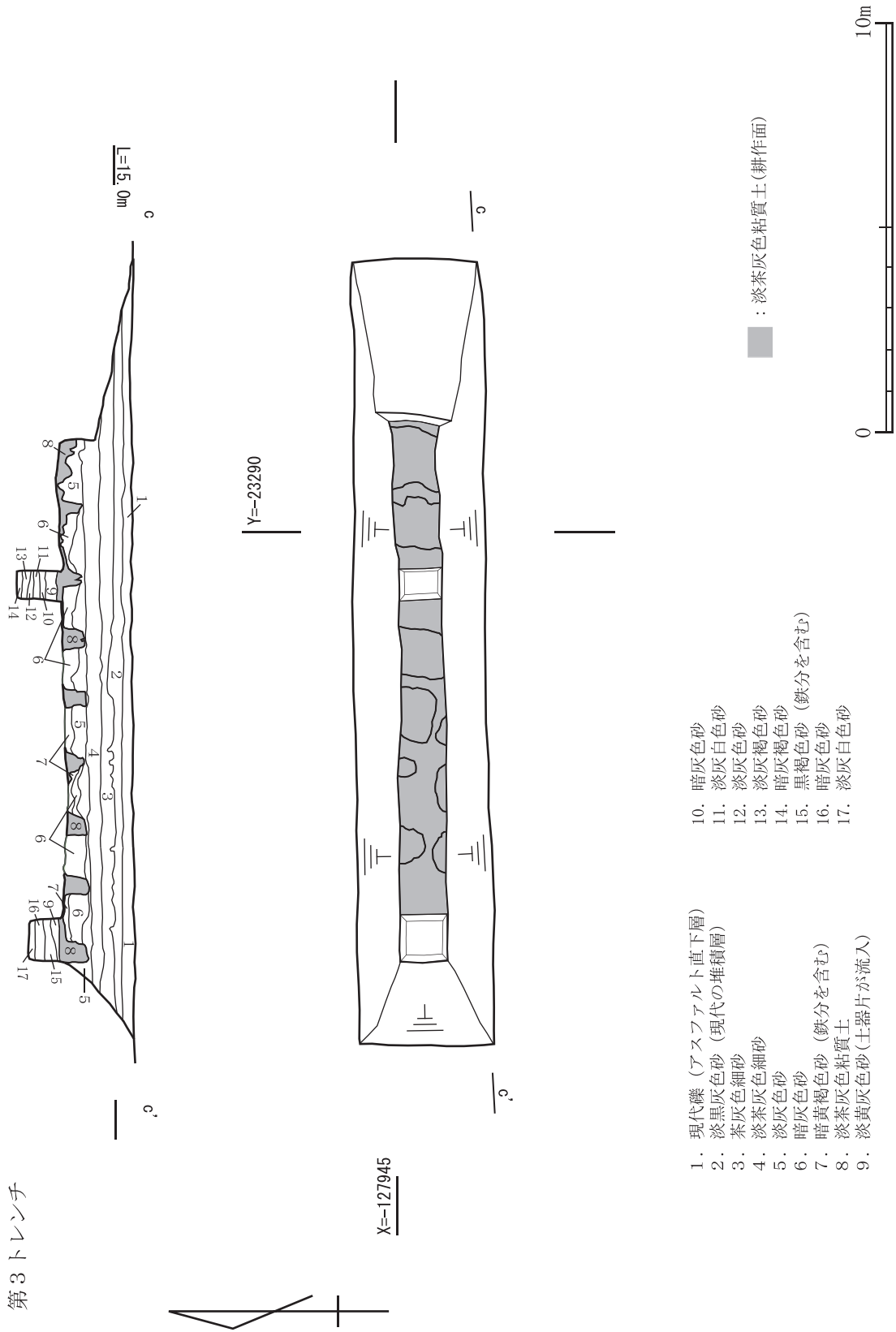
- 1. 現代礫 (アスファルト直下層)
- 2. 暗黄灰色砂 (現代の堆積層)
- 3. 黒茶灰色砂
- 4. 茶灰色細砂
- 5. 淡茶灰色細砂
- 6. 淡灰色砂 (3~5 cm程の礫を含む)
- 7. 暗灰色砂
- 8. 暗灰色細砂
- 9. 淡茶灰色粘質土 (少量の瓦器片が混じる)

- 10. 淡緑灰色粘質土
- 11. 淡茶灰色砂
- 12. 淡灰色粗砂 (3~5 cm程の礫を含む)
- 13. 淡黄灰色砂
- 14. 暗緑灰色粘質土
- 15. 暗青灰色粘質土
- 16. 淡黄灰色砂
- 17. 暗茶褐色砂 (鉄分が混じる)

■ : 淡茶灰色粘質土 (耕作面)

第4図 第2トレンチ平面・断面図

第3トレンチ



- 1. 現代礫 (アスファルト直下層)
- 2. 淡黒灰色砂 (現代の堆積層)
- 3. 茶灰色細砂
- 4. 淡茶灰色細砂
- 5. 淡灰色砂
- 6. 暗黄褐色砂 (鉄分を含む)
- 7. 暗黄褐色粘質土
- 8. 淡茶灰色砂(土器片が流入)
- 9. 淡黄灰色砂(土器片が流入)

- 10. 暗灰色砂
- 11. 淡灰白色砂
- 12. 淡灰色砂
- 13. 淡灰褐色砂
- 14. 暗灰褐色砂
- 15. 黒褐色砂 (鉄分を含む)
- 16. 暗灰色砂
- 17. 淡灰白色砂

第5図 第3トレンチ平面・断面図



第6図 出土遺物実測図

6図1・2)や近世の土器片が数点出土しているが、洪水による

堆積のため、この遺構の時期を示す可能性は低い。下層遺構を確認するために2か所の断ち割り(約1.2m)を行ったが、30cm前後の粘土層より下層は洪水による砂の堆積層であった。

(3) 第3トレンチ 調査地内の西端部に設定した調査区である。現地表面から20cm程で現代の耕作面、その直下約1.5mの深さまでは木津川の氾濫(洪水)による数層の砂の堆積層、約1.8mで粘土質の安定面を確認した(第5図)。粘土質の安定面で、2トレンチと同様の溝状の遺構を確認した。溝は、南北方向に約1.3mの幅で等間隔に掘り込まれて、底部には鋤などの耕具痕跡が残っていた。下層遺構を確認するために2か所の断ち割り(約1.2m)を行ったが、10cm前後の粘土層より下層は洪水による砂の堆積層であった。砂の堆積層(第5図第9層)から、古墳時代の須恵器杯身・壺の破片(第6図3～5)や土師器甕の破片(図版第6-(3)出土遺物6)が出土したが、こちらも洪水による堆積のため、この層の時期を示す可能性は低い。

#### 4. まとめ

今回の調査は、遺跡範囲および遺構の確認が目的の試掘調査であったが、等間隔に掘り込まれた溝群を除いて遺構は確認できなかった。今回、第2・3トレンチで確認した等間隔に掘り込まれた溝群は、詳細な時期については不明であるが、おそらくは近現代の耕作によるものと推測される。また、粘土層の上下では、各トレンチの断面観察により木津川の氾濫による洪水砂の堆積状況が確認でき、その堆積状況の観察から、氾濫による水および砂は主として北西方向に流れていたことがわかった。また、過去に複数回の氾濫による砂の堆積があることも確認できた。

今回の対象地内には、明確な時期を示す遺構の存在は確認できなかったが、後世の木津川の洪水破堤によって遺構が消失した可能性も考えられる。(村田和弘)

注1 調査参加者:川原惇司・松元章徳・村上優美子・長尾美恵子・大村潤子

ご指導・ご教示を頂いた方(敬称略):増田富士雄(同志社大学理工学部・当調査研究センター理事)、鷹野一太郎(京田辺市教育委員会)

注2 鷹野一太郎「魚田遺跡第1次・第2次発掘調査概報-大住地区ほ場整備事業地内の調査 その1」(『田辺町埋蔵文化財調査報告書』第22集 田辺町教育委員会)1997

中村周平「大住地区府営ほ場整備事業関係遺跡発掘調査概要 魚田遺跡第6次・西村遺跡・門田遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第107冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)2003

注3 鷹野一太郎「新田遺跡発掘調査概報」(『京田辺市埋蔵文化財調査報告書』第27集 京田辺市教育委員会)1999

筒井崇史・岡崎研一ほか「新田遺跡第5次発掘調査概要」・「新田遺跡第6次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第94冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)2000

## 附載 京都府京田辺市魚田遺跡付近の地形と洪水破堤堆積物

増田富士雄（同志社大学理工学部）・伊藤有加（同志社大学工学研究科）

坂本隆彦（同志社大学聴講生）・佐藤智之（京都大学大学院理学研究科）

### 1. はじめに

魚田遺跡の発掘トレンチ壁の地層を観察することができた。観察結果とこの付近の地形や表層地質の解析から、魚田遺跡付近の地形の成因に関して新しい知見を得ることができたので報告する。

### 2. 魚田遺跡の地点と周辺の地形

魚田遺跡付近の地形は、畑作地として利用されている微高地と、その周辺の湿田として利用されてきた低地、低地に刻まれた流路跡、さらに散在する集落（岩田、内里など）の盛り土が特徴である。

魚田遺跡は標高15.5mほどの微高地上にあり、周囲の低地より1mほど高く（第7図）、横断面はかまぼこ型をしている。乾燥した畑作地からなる微高地は、1948年（昭和23年）に撮影された空中写真（第8図）で容易に識別できる。この零形（ローブ状）をした高まり地形は、調査地点の約500m東方を北流する木津川の洪水破堤（堤防決壊）による堆積地形と考え



第7図 京都府京田辺市魚田遺跡の位置  
国土地理院1/25,000「淀」「宇治」に、20cm間隔の等高線と、大矢・久保(1993)の地形分類図から“微高地”と“流路跡”の一部を加筆。

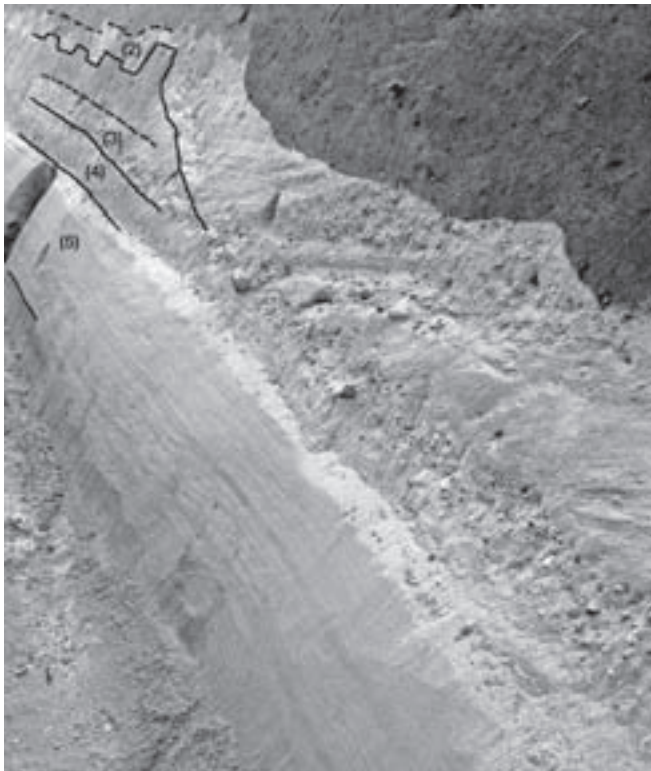


第8図 魚田遺跡付近の様子  
○印が観察地点。1948年撮影の空中写真。第1図と同範囲同スケール。

か(2007)。この堆積地形の形成時期について、大矢・久保(1993)は1860年(万延元年)の“大住切レ”(巨椋池土地改良区1962)に、植村ほか(2007)は江戸時代後期かそれ以降、田辺町教育委員会(1997)は1896年(明治29年)の洪水でつくられたとし、この微高地をひとつの砂礫堆(大峰砂堆：植村2007)として識別している。また、この微高地から蛇行しながら北西流する流路跡(第7図、第8図)と、南側の微高地との間の流路状の低地は、旧河道とされている(大矢・久保1993)。植村(2008)は南側の流路跡について、1802(享和2)年と1815(文化12年)の破堤に伴う洪水流がこの地形的な



第9図 上部の黒灰色粘質土（第3図の3層）の下部にみられる耕作痕（スケールはねじり鎌）



第10図 トレンチ北壁にみられる破堤堆積物（【2】～【5】）  
砂礫層（【2】層）は谷状に分布し、写真の右から左に傾斜した（東から西に流れてできた）フォーセット面をもったトラフ型斜交層理を示す。これは調査地点では最も破堤場所に近い堆積物といえる。反対に下部の細粒砂層（【5】層）は破堤堆積物の縁辺相を示す。下部の細粒砂層（【5】層）の厚さが約45cm。

30cmで、砂質やシルト質の粘土が主で、根痕や生痕（巣穴や潜り痕）がみられた。泥は氾濫水の浮遊物質である濁りから沈積したもので、いわゆる“氾濫原泥層”である。

砂層と砂礫層は、木津川が運搬する堆積物の特徴である花崗岩類起源の鉱物粒子から構成され、細粒な砂は黄色、粗粒な砂は白色、砂礫層は灰色を呈する（第10図）。砂層と砂礫層は、一部基底での侵食で欠けるが泥層や耕作土層・土壤層で区切られる。すなわち、それぞれ違った時期に堆積した層であることがわかる。このトレンチ断面（第3図）では、厚さ5～60cmの砂層と砂礫層が6～8枚（第3図の【1】～【6】層）認められた。一枚の砂層や砂礫層の内部構造は、比較的単純で、何枚もの層が厚く重なるということはなく、また、重なった層の中で粒径が上方に細粒

凹地を流れたと考えている。

要するに、魚田遺跡のある微高地は江戸末期以降の比較的新しい時期の破堤堆積物からなるもので、周辺の流路跡は江戸後期以降の旧河道あるいは氾濫流の流路と考えられている。

### 3. 破堤堆積物

第1トレンチの断面で観察できた地層は、全層厚が約3.2mで、土壤層、耕作土層、泥層、砂層、砂礫層であった（第3図）。観察結果から、これらは河川の氾濫原堆積物が起源で、泥層は洪水氾濫水の浮遊物質起源で、砂層と砂礫層は破堤堆積物であり、土壤化した層や人間が改変した層を含むことがわかった。

耕作土には、耕作具で幅10～15cmで40～60度の角度で耕した結果できたと考えられる、長さ10～20cmの互層状の特徴的な構造が認められた（第9図）。また、地表面近くには厚さ20～40cmの有機質と思われる黒色の砂質土（第3図の第3層）がみられ、深さ約1mの窪地（凹地）を埋積していた。この黒色層には耕作に使われたと考えられるビニール製の網や紐や農薬袋などが含まれ、最近40～50年以内の堆積物と考えられる。

泥層（第3図の第13層）は厚さ5～



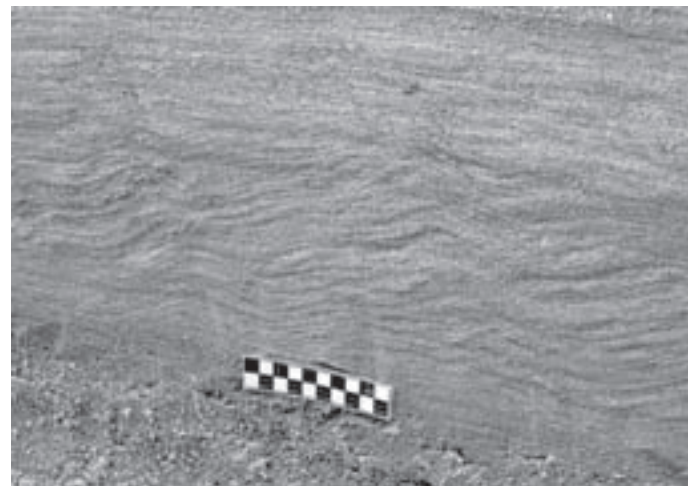
化あるいは厚さが上方に薄層化するということもない。これは河川の流路堆積物(増田1988、1998、1999、2004)ではないことを示している。また、砂層の一部(例えば【3】層や【4】層)には、下位の泥層から上方に漸移し粗粒化するものがみられ、洪水氾濫堆積物の特徴(増田・伊勢屋1985、鈴木2000)を示す。

砂層や砂礫層には水流下で掃流運搬された結果できた堆積構造が発達する。一枚の層の内部の堆積構造の変化から、層が堆積するときに時間とともに、あるいは側方に水理条件が連続して変化していた様子が読み取れる。例えば、細礫まじり粗粒砂層(第3図【3】層)では、下部(厚さ18cm)の平行葉理から、上部(厚さ30cm)の平板型斜交葉理へと漸移している(第11図)。平行葉理は水流エネルギーのより高い条件下で砂床上にできる平滑床の痕跡であり、斜交葉理はより低いエネルギー条件下における砂堆(デューン)の移動によ



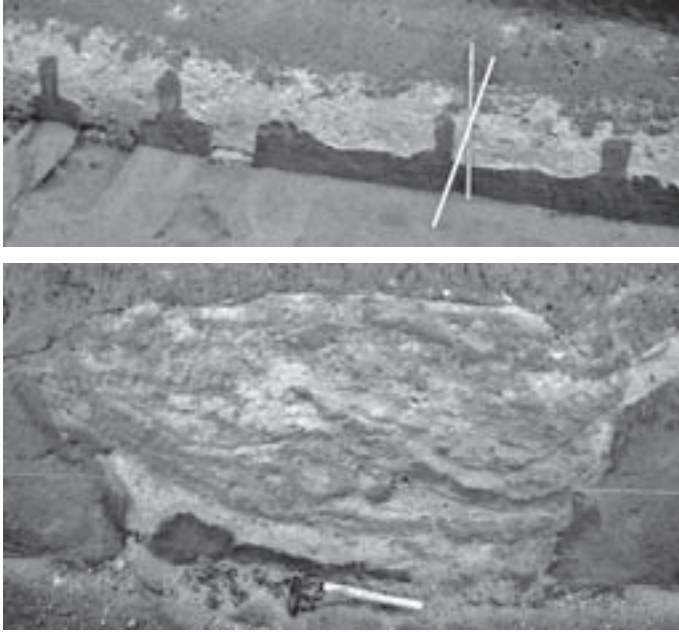
第11図 礫まじり粗粒砂層にみられる平行葉理(下部)と斜交葉理(上部)

下部から上部へと水流のエネルギーが低下したことがわかる。また、斜交葉理の傾斜方向から画面の右から左への流れで堆積したことがわかる。(スケールはねじり鎌)



第12図 細粒砂層(第3図【5】層)にみられるクライミングフォーセット葉理(下部)と平行葉理(上部)

下部は写真の右から左に向かって砂の堆積が進行していったことが、フォーセット葉理の傾斜方向からわかる。堆積構造の違いから、下部から上部へと水流のエネルギーが増加したことがわかる。(スケールは長さ10cm)でできる構造である(増田1988、1999)。しかも斜交葉理の角度はこの粒度での安息角より小さく(15~30度)、砂の供給量が多かったこと(増田2004、2005)を示している。すなわち、この砂層は供給量が多くしかも減衰する流れから形成されたものであることがわかる。そして上部が耕作土化していることから、洪水氾濫堆積物であるといえる。また別の例として、細粒砂層(第3図、第10図【5】層)では、下部は波状のフォーセット葉理が下位の砂質泥の褐色土壤にダウンラップして前進型をとって堆積している(第12図)。これは供給量の多い場でできるクライミング構造であり、上部は平行葉理に漸移している(第12図)。この砂層は、泥質であることから、広がる氾濫水から堆積量の大きいカレントリップルを伴ったフォーセット葉理として急速に堆積し、さらに流速の増加あるいは堆積の進行による水深の減少などから高い水理条件の平滑床に変わったと思われる。しかもこの砂層は泥質でありながら砂質部は分級(淘汰)が良いことから、かなり安定した流れから、すなわちより下流側での堆積を示している。



第13図 泥層に掘られた人工の溝に洪水流が流れ込んで堆積した破堤堆積物の含礫砂層(白色部)。泥層の破壊片が混入している。(上:スケールは長さ1m、下:スケールのねじり鎌は長さ32cm)

今回の発掘地点の南西方約250m付近でも同様の“耕作溝”の上を白灰色～白褐色砂の洪水堆積物が覆っており、分布標高や層序から推定すると、この砂礫層【2】層に連続すると思われる。

以上のことから砂層や砂礫層は洪水氾濫堆積物で、破堤や越流に伴って運ばれたものであるといえる。しかも堆積量が多いことからほとんどは破堤堆積物であるといえよう。すなわち、この付近の木津川の流路堆積物にみられる中礫～大礫が含まれること、耕作土や土壌を覆って堆積していること、供給源に近い場での堆積と思われる粗粒な層では側方での厚さの変化が大きく、縁辺部に堆積したと考えられる細粒層では一定の厚さで水平に堆積していること、強さが時間とともに変化する流れから堆積していること、周辺では氾濫原の泥層に移り変わっていること、堆積が何度も繰り返していることなど、破堤堆積物であることを強く示している。

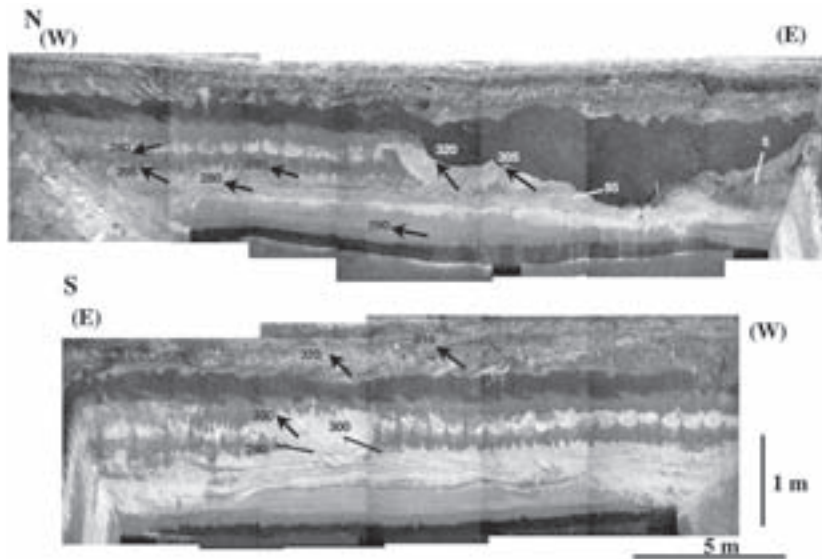
ここで確認できた破堤堆積物の堆積年代は現在のところ決めることができない。破堤堆積物の堆積年代を木津川の洪水記録から推定してみよう。最も新しい【1】層は、ビニール製品が含まれる黒色層の上位にあることから(第3図)、昭和34年9月(伊勢湾台風)の破堤洪水(植村ほか2007)による可能性が大きい。この地点で最も粗粒な【2】層はその黒色層の下位にあることから、1896年(明治29年)の堤防決壊に伴う可能性が高い。この推定は、すでに述べたように、【2】層に連続すると思われる西に隣接する地点での“洪水砂層”に対する田辺町教育委員会(1997)による。これより下位で最も厚くしかも細粒(遠方由来)である【5】層は、この調査地よりやや上流点での大きな破堤の出来事、1860年のいわゆる“大住ギレ”に由来すると考えている。

#### 4. 古流向

洪水破堤堆積物と考えられる砂層や砂礫層には、すでに述べたように、堆積構造がみられる。それらは流れの中で底面に形成された小地形(ベッドフォーム)の痕跡である。例えば、斜交葉理

最も粗粒な砂礫層(第3図【2】層)は、基底が侵食面であることが多く、側方で厚さが大きく変化し、西北西～東南東方向に伸びた深さ50mの谷状地形がみられた(第3図、第10図)。砂礫層には峰がうねった砂堆(デューン)の移動によってできるトラフ型斜交層理(増田、2004)がみられる(第10図)。トレンチ西方では砂礫層は厚さと粒度を減じる。下位の土壌層には人工的な凹凸がみられる(第10図)。調査地点内の西側の別のトレンチでは、特徴的な人工の掘削穴をこの砂礫層が埋め尽くしている(第13図)。田辺町教育委員会(1997)によれば、

や斜交層理はカレントリップルやデューンのフォーセット面の痕跡で、最大傾斜方向がその場所での流れの下流方向を示す(増田・岡崎1983)。トレンチで観察できる堆積構造から堆積時の流れの方向(古流向)を求めると、西北西へあるいは北西への流れを示すものが多い(第14図)。すでに述べた



【2】層がつくる小さな流路構造(第3図、第14図)に注意。

第14図 トレンチ壁(北壁と南壁)で測定した古流向

流向は紙面上方を北として流下方向を時計回りの角度で表示。破堤堆積物が西あるいは北西へ運ばれて堆積したことがわかる。写真は縦横の縮尺が異なることに注意。

の伸びの方向も西北西-東南東であった。古流向は、破堤堆積物の砂層や砂礫層が木津川からもたらされたものであることを示している。

## 5. 微高地と低地上の流路跡の形成

魚田遺跡のある畑作地からなる微高地は、6～8枚以上の砂質や砂礫質の破堤堆積物の層が重なっており、1枚の厚い層からなる、すなわち1回の破堤事件でつくられたものからなるのではないことがわかった。これはすぐ西方での調査結果(田辺町教育委員会1997)からも、洪水砂層が複数枚存在するようにみえることと調和的である。

微高地付近にある旧河道とされた流路跡(第8図)は、表層部の地下地質(関西圏地盤情報協議会、2008)からみると、表層の泥層や砂層が侵食されてできており、表面だけにみられる侵食地形であることがわかる。すなわち、流路下に流路堆積物の厚い砂質層や、流路底のラグ堆積物の礫層がみられないことから、「旧河道」ではなく、破堤させた洪水流が泥質の氾濫原上につくった侵食性の流路跡であるといえる。空中写真判読や地形分類図(大矢・久保1993)から判断すると、これらの流路跡は破堤堆積物の集合体である微高地付近から発生しているようにみえる。

最も明瞭な流路跡である魚田遺跡のある微高地から北西に向かうものは、波長約800～1000mで蛇行をしている(第7図)。蛇行波長は形成した洪水流量や平均流量と関係するから(牧野ほか1981)、この波長からすると現在の木津川本流の洪水流量よりは小さいことがわかる。

魚田遺跡のある微高地はすぐ南の微高地(第8図、植村2008の門田砂堆)や周辺の小さな微高地と一連の堆積地形を形成している可能性が地下表層地質(関西圏地盤情報協議会2008)から推定できる。すなわち連続する粗粒な堆積物に思える。破堤によって微高地に堆積がおり、その洪水氾濫流が氾濫原上に流路跡をつくったのである。つまり、微高地と流路跡は破堤に伴ってつくられた一連の地形で、流路跡には破堤部の復旧がなされるまで洪水後も河川流が流れたと思われる。

木津川が大きく屈曲する大住付近では過去に何回も破堤した記録があり(水戸1990、大矢・久保1993、植村ほか2007、鈴木2008)、これらの地形が幾回かの破堤に伴って形成されてきたという考えを支持している。

## 6. まとめ

京都府京田辺市の魚田遺跡のトレンチで観察できた地層の形態、堆積様式、古流向と、周辺の地形、地下地質、および洪水記録などから、魚田遺跡がある畑作地として利用されている微高地は、木津川の洪水破堤(堤防決壊)による堆積物が何枚も重なってできたもので、それに伴う流路跡は、洪水流が低地面の上を流れてできた侵食地形であることがわかった。

(謝辞)京田辺市教育委員会の鷹野一太郎氏には文献をご教示頂いた。記して感謝します。

### 引用文献

- 関西圏地盤情報協議会(2008)「関西圏地盤情報データベース」CD-ROM-2008版
- (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター(2000)「新田遺跡第5次発掘調査概要」「新田遺跡第6次発掘調査概要」京都府遺跡調査概報94、73-106
- 牧野泰彦・増田富士雄・桂 雄三(1981)「河川堆積物から推定した“古流路”の形状特性値と水量-茨城県の第四系を例として」茨城大学教育学部紀要(自然科学)30、71-86
- 増田富士雄(1988)「ダイナミック地層学-古東京湾の堆積相解析から-(その1 基礎編)」応用地質(日本応用地質学会)29(4)、312-321
- 増田富士雄(1998)「ダイナミック地層学-堆積と累重の過程を明らかにする新しい地層学」深田研ライブラリー(深田地質研究所)17、71p
- 増田富士雄(1999)「透水層・帯水層のトレース:ダイナミック地層学からのアプローチ」地下水技術(地下水技術協会)41(10)、1-15
- 増田富士雄(2004)「堆積システムと堆積物」堆積ショートコース・テキスト、日本堆積学会(京都)、512p
- 増田富士雄(2005)「超高分解能層序学:地層から読み取る「年・月・日・時」地学雑誌(東京地学協会)114(3)、419-433
- 増田富士雄・伊勢屋ふじこ(1985)「“逆グレーディング構造”:自然堤防帯における氾濫洪水堆積物の示相堆積構造」堆積学研究会報(堆積学研究会・日本堆積学会)22/23、108-116
- 増田富士雄・岡崎浩子(1983)「筑波台地およびその周辺台地の第四系中にみられる方向を示す構造」筑波の環境研究7C、99-110
- 水戸政満(1990)「近世木津川水害と年貢収納-川底の上昇による水害の深刻化」立命館文学518
- 巨椋池土地改良区(1962)「巨椋池干拓誌」巨椋池土地改良区、828p
- 大矢雅彦・久保純子(1993)「淀川水害地形分類図・説明書」淀川工事事務所 130p
- 鈴木一久(2000)「洪水氾濫の堆積学」地団研専報(地学団体研究会)48 69p
- 鈴木一久(2008)「近世における山城地域の水害」近畿大学教職教育部紀要20(1)、37-58
- 田辺町教育委員会(1997)「京都府田辺町魚田遺跡第1次・第2次発掘調査概報-大住地区は場整備事業地内の調査 その1」田辺町埋蔵文化財調査報告書22、1-11
- 植村善博(2007)「京都盆地における堤内池沼の地形的・防災的意義」歴史都市防災論文集1、67-74
- 植村善博(2008)「京都盆地南部、木津川・宇治川低地の水害地形」佛教大学文学部論集92、29-43
- 植村善博・小林義仁・木村大輔・新藤美奈・山中健太・浅子里絵・杉山純平・三宅智志・山下博史(2007)「木津川・宇治川低地の地形と過去400年間の水害史」京都歴史災害研究1、1-24

# 圖 版



(1) 調査地遠景(西から)



(2) 調査前全景(南から)



(3) 第1トレンチ重機掘削  
作業風景(東から)



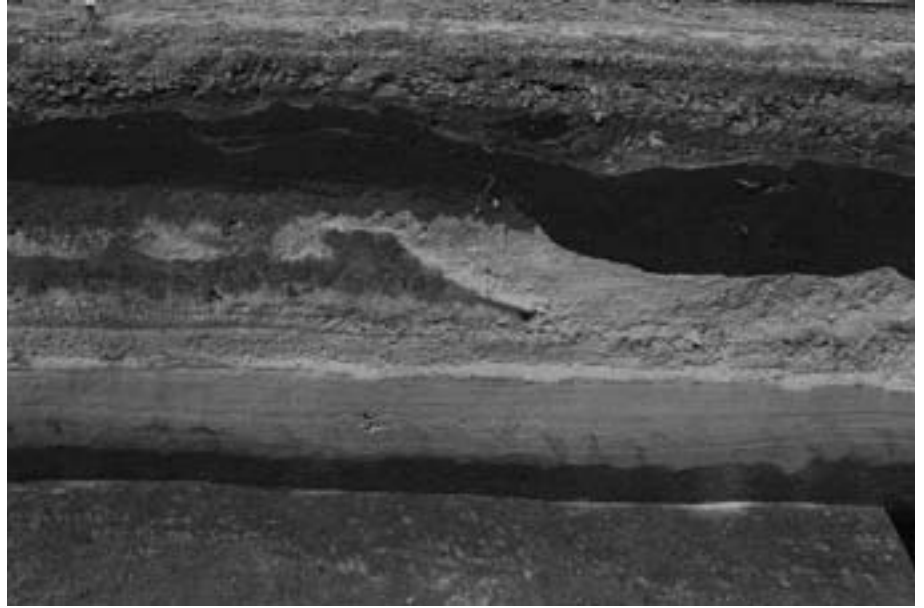
(1) 第1トレンチ全景(西から)



(2) 第1トレンチ人力掘削  
作業風景(北西から)



(3) 第1トレンチ東壁断面  
(西から)



(1) 第1トレンチ北壁断面①



(2) 第1トレンチ北壁断面②



(3) 第2トレンチ全景(西から)





(1) 第2トレンチ溝状遺構掘削  
作業風景(南から)



(2) 第2トレンチ溝状遺構  
完掘状況(南から)



(3) 第2トレンチ溝状遺構  
完掘状況(東から)

(1) 第2トレンチ南壁断面  
(南から)



(2) 第2トレンチ南壁と溝状遺構  
(北から)



(3) 第3トレンチ全景(西から)

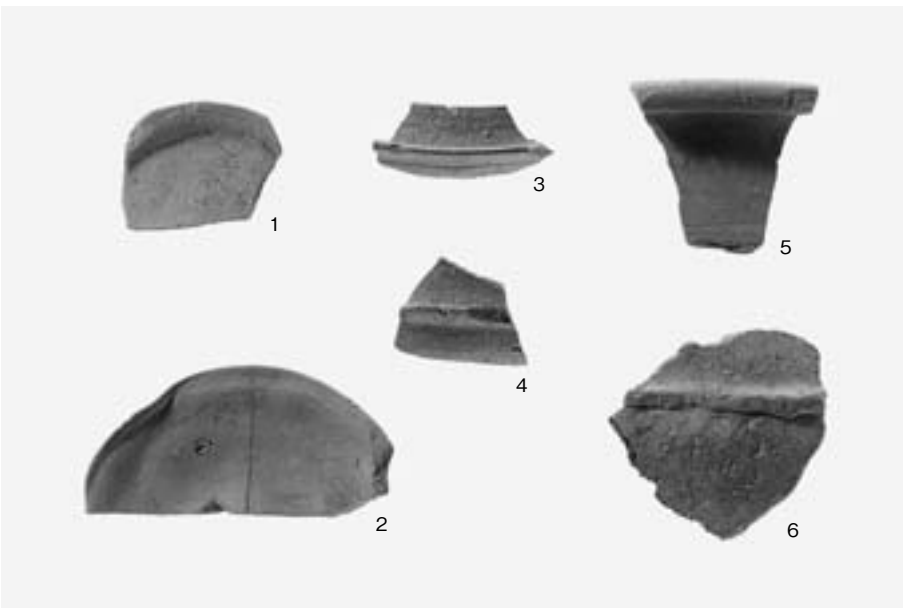




(1) 第3トレンチ南壁と溝状遺構  
(北東から)



(2) 第3トレンチ南壁と溝状遺構  
(北から)



(3) 出土遺物

## 京都府遺跡調査報告集 第133冊

平成21年 3月31日

発行 (財)京都府埋蔵文化財調査研究  
センター

〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3  
Tel (075)933-3877(代) Fax (075)922-1189  
<http://www.kyotofu-maibun.or.jp>

印刷 三星商事印刷株式会社

〒604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下ル  
Tel (075)256-0961(代) Fax (075)231-7141